

平成20年度高等学校入学者選抜審議会  
第3回県立高等学校入学者選抜の在り方検討小委員会  
記録概要

平成20年10月23日(木) 10:00~12:00  
県庁18階 1801会議室

<小委員会委員>

菅野 仁(審議会副委員長(座長))

小平英俊(審議会委員)

鹿野良子(審議会委員)

齋藤公子(審議会委員)

榎木喜一(専門委員)

山内明樹(専門委員)

小畑研二(専門委員)

(欠席 木島美智子(専門委員))

<県教育委員会>

高橋 仁(高校教育課長)

(開会)

(事務局) (委員出席確認)

(座長) 本日は、中学校・高校に対する調査の結果もみた上で、前回までの議論をより深め、現段階で本小委員会としては改善の方向性はこのように考えているというところまで、話をもっていきたい。

(事務局) (資料確認)

(座長) 第2回小委員会審議内容について、事務局から説明をお願いします。

(事務局) (記録概要の説明)

(座長) 前回の小委員会での主な意見等が課題別の表の形で資料としてまとまっているが、これについて事務局から説明を。

(事務局) (説明)

(座長) 今後の方向性を議論する際に、この資料を改めてみていただく形で、質問があればその時に。  
次に「現行公立高校入試制度に関する調査結果について」事務局から説明をお願いします。

(事務局) (説明)

(座長) 御質問、御意見ををお願いします。

- (委員) 宮城県の入試制度はだんだんと進化してきたことは間違いない。その時々  
の社会情勢等を踏まえ、改善を図ってきている。今回の改善で後退させるべき  
ではない。問題点を明確にして、改善をしていくというのが、私の基本的な  
立場である。
- (座長) その他、調査結果について、御質問、御意見を。  
今後方向性をまとめる上で確認したいが、例えば、Q 1 0 - 3 について、ア  
とウはリンクするの。つまり、校長推薦で学力検査を課すということはで  
きるのか。
- (委員) 校長推薦をはずし、自己推薦のみにすると、生徒、保護者の意識として、推  
薦出願を希望する者が多くなるはず。自己推薦の導入は難しいと思う。  
推薦入試においては、中学校では高校との信頼関係を大切にしている。この  
信頼関係を維持する上でも、校長推薦は必要だと考えている。
- (座長) 私も基本的には賛成である。調査結果をみると推薦入試に学力検査を入れた  
いという声が多いので、無視はできないのでないか。校長推薦で学力検査を  
課すことは可能なのかという意味。
- (高校教育課長) 学力検査を推薦入試でも取り入れてほしい、推薦入試をなくす、自己  
推薦も考えてほしい等、中学校としてまとまった意見ではないが、改善を求  
める声は大きい。
- (座長) アンケート結果について何かないか。
- (委員) Q 1 3 - 2 のウの選択教科の評定の廃止について求める声は大きい。これ  
はよいと思う。生徒が選択し学習に取り組んでいるので、まじめに喜んで取  
り組む傾向があり、差が生まれにくい。私も大賛成だ。
- (事務局) Q 1 3 - 2 のデータは、Q 1 3 でイと回答した学校が、アからキを回答。ア  
からキは 3 5 3 の複数回答を分母にした割合で%、 から は選択した学校  
の実数である。
- (座長) アからキは%、 から は実数である。
- (委員) Q 1 3 のイは何校か。
- (高校教育課長) 分母は、中学校が 2 2 4 校、高校は 8 4 校である。
- (委員) 全体の中でどれぐらいの学校が廃止を求めているかをみる時に、複数回答数  
に対する割合でなく、イに対する割合の方がみやすいのでないか。  
調査書の改善についての意見の傾向は、中学校は作成の負担感もあり、廃止、  
簡略化の意見が多い。一方、高校はエ、オは詳述化の意見があり、重視して  
いるということか。高校で選抜の材料として何が必要で何が不必要かを整理

していくと、改善の方向性がみえてくるはず。

(座長) この指摘について。

(高校教育課長) 初めて調査をしてみて、中・高の調査書についての考え方の違いを再認識した。また、評定については、3年のみでという御意見があるという認識だったが、調査では3年分必要との結果となっている。このデータを参考に、運用面で改善できるものは早くやっていきたい。

(座長) 選択教科の廃止についての中学校の意見は実数にしても多い。何かのアクションを起こす必要がある。その他はないか。

(委員) 調査書の本来の機能について、この小委員会で確認した方がよいのではないか。前回までの検討で、小委員会の共通した認識があれば教えてほしい。

(高校教育課長) 前回までの検討の中で、調査書は、中学校3年間の生活をまとめたものであるということ、それを選抜の材料として利用しているということを確認している。また、高校側では評定の5段階だけでなく全ての項目について選抜の材料として活用している。調査結果をみると、今後は、選抜資料として活用する調査書という視点も大切という意見があり、その視点での議論が必要だ。

(座長) 前回の検討におけるコンセンサスについては、高校教育課長からの説明のとおり。その他は。

(委員) 調査書について。

一般入試の選抜の資料として、行動の記録は、中学校では人格形成に力を入れており、選抜の全ての場合において重視して活用してほしい。  
学習の記録の観点別学習状況は生徒の到達度を示し、先生方はきちんとした尺度をもって評価をしているものである。観点別学習状況を選抜の資料として最優先で活用することで、生徒の全体像がよりみえるはずである。  
文章記述を求める箇所が多いが、作成する中学校の先生方の苦勞に添えるよう改善してほしい。

(委員) 観点別学習状況の導入は後から。また、評定は、かつての相対評価によるものから、現在は絶対評価へ替わった。生徒の伸びしろはわかるが、全体の中の位置づけがみにくい評価方法になっている。まだ、絶対評価の活用については不慣れであり、同様に、観点別学習状況も、研究不足である。

(委員) アンケート結果からも、そのような意見は散見できる。評定の数字だけでは生徒の様子を読み取ることが困難であり、到達度を示す観点別学習状況を重視するとよいと思う。

(高校教育課長) 選抜の資料として活用するためには、数値化が必要。評定は各教科の生徒の状況を抽象したものとして示しているものでないか。観点別学習状況は中学校での生徒の記録としてはたしかに重要であるが、今後は選抜の材料としての

活用について、更に研究、議論したい。

また、調査書は受検者全員について選抜資料として活用している。選抜資料では全ての生徒について一覧表を作成している。中学校で苦労して作成していただいた調査書は決して無駄にしてはならない。

- (委員) 全員の調査書について一覧表にして活用していることは理解した。行動の記録については、更に重視してほしい。生徒の性格行動面をきちんとしたものにさせたいということに、中学校の先生は日々努力している。行動の記録には、子どもたちの成長が記録されている。総合的判断の中で重視して活用してほしい。
- 入試改善は進んでいるが、まだまだ、改善すべきものがある。それは、推薦入試を受検する一部の生徒のみ問われている「志望動機」である。一般入試の生徒には、高校側から求められておらず、中学校においては一般の進路指導するのみである。高校の中途退学等の現状を考えると、受験生全員に問うとよいのではないか。中学校も高校も変わるはずである。
- (座長) その他、調査結果についてあるか。
- (委員) Q 3 の高校側の回答は半々であり、選択問題は必要であると感じた。Q 4 - 2 は、調査書点と学力点の割合は学校裁量幅をもたせる方向の意見が多いという印象。
- 推薦については、校種間、学科間で考え方が異なるようである。専門学科の推薦については、専門学科だけのデータをみるとよいのではないか。
- Q 1 3 - 2 の中学校では数字が小さいところは重要にしてほしい部分ではないか。また、高校では、活用の仕方が学校によって違うことがわかる。中・高で一致するア・ウの選択科目の評定は簡略化の方向で改善すべきところではないか。また、エ・オ・カのように中学は簡略化、高校は詳述化と意見が異なるところは今後検討が必要でないか。
- (委員) 調査書については、選抜の資料として活用の程度が低いということで、中学校ではあきらめムードがあり、それを反映しているのではないか。
- (委員) 選抜の資料として、高校側で調査書をどのように扱っているか、中学校側に明確に伝わっていないのではないか。中学校では、生徒のよい面をたくさん取り上げて記載している。仮に選抜の資料としてしっかり扱っていないということであるならば、簡略化という意見になるのではないか。
- (高校教育課長) 分析において、専門学科のみのデータが必要という意見もあったが、その他、調査結果の分析の仕方・まとめ方のアイデアがあればお聞かせいただき、11月20日の審議会までに準備したい。
- (座長) 後日、事務局に連絡をしてもらいたい。
- 次に、「中間まとめ」に今後盛り込む内容の大まかな柱立てについて、事務局に準備を願った。このことについて事務局から説明をお願いする。

- (事務局) (説明)
- (座長) 御質問・御意見は。柱立てはこの線でよいか。
- 賛成の声あり
- (座長) 柱立てはこの線ということにし、今後、課題についての改善の方向性を肉付けをしていきたいと思う。  
では、ここで休憩とする。
- (休憩)
- (座長) では再開したい。個別の課題を検討する前に、今回の入試改善の理念、基本的な考え方について、議論したい。
- (委員) 高校入試において、高校側が中学校に対し何を望んでいるのかを明確にして欲しい。私としては、当日の学力、中学校3年間の学力・生活の様子、入学の動機をきちんとみてほしいと思う。
- (委員) 同感である。学力、調査書、生徒の特色のそれぞれの観点で選抜する入試があるとよいと思う。
- (委員) 高校入試というハードルを越えることによって、子どもたちが伸びる一つの機会としたい。アンケート結果をみると、現在の推薦入試では必ずしもそのようになっていないように見える。子どもたちの成長に資する入試でありたい。
- (座長) 単なる選抜という枠を超えて教育的な観点ということか。
- (委員) 選抜という機能はもちろんであるが、例えば、この制度があるために学習意欲が低下するといったことはよくないと思う。
- (委員) 私も賛成である。入試改善で中学校の指導が充実する、目的意識をもって高校生活を送る生徒が増えるといった入試制度にしていきたい。
- (座長) 各委員から御意見を頂きたい。
- (委員) 両委員の意見に同感である。
- (委員) 中学校からみると、4月の高校生活の滑り出しの時期が気になる部分。中学校と高校とをうまく接続させる入試の在り方についても考えたい。
- (委員) 保護者の立場からも、子どもの成長に資する入試という目指すべき方向はよいと思う。また、わかりやすい入試制度としたい。中学校と高校間の不信感、特に子どもと先生間との不信感等は子どもたちにとって不幸である。

- (座長) 方向性について小委員会でもまとまっているようであり、理念についてまとめさせていただく。  
一つは、学力はきちんとみなければならないこと。この場合の学力とは、当日の学力等、単に点数化されるものだけでなく、日常生活の質も含む、トータルとしての学力である。プロセスもみれる複眼的な視点が必要である。  
二つ目は、志望の動機を加えることで、学習意欲や中学校と高校の接続が円滑にできるのでないかということである。高校入試を子どもたちの社会に向かうきっかけにしたい。特に宮城県の場合、この高校入試が第一段階の人生の大きな選択となる。  
今後、理念を文章化していく中で、各委員にフィードバックしていく。  
続いて、推薦入試、一般入試、調査書の活用、受検機会について、個別に議論を深めたい。まず、アンケート結果等でも様々意見がある、推薦入試について御意見を頂きたい。
- (委員) アンケート結果をみると、普通科については廃止の意見、専門学科・総合学科については改善を図りながら継続という意見が多い。学校の特色がハッキリしている専門学科・総合学科は継続でよいか。一方、普通科については、このままの制度を継続していくのは難しいのでないか。普通科については十分検討する必要があるのではないか。
- (座長) 普通科の推薦入試については場合によっては廃止という意見だと考えてよいか。その他の御意見は。
- (委員) 普通科における推薦入試の最大のメリットは、受験生の立場で考えると、複数の受検機会が確保されること。ただし、校長推薦という形態では不公平感という問題がある。校長推薦を残すのであれば、割合をしぼる必要があるのではないか。また、割合をしぼれば学力検査は不要になるのではないか。自己推薦であれば、学力検査は必要になると思う。
- (座長) 委員の意見は、普通科の推薦入試についてと考えてよいか。  
他に御意見は。
- (委員) 普通科は5教科の学力を中心に選抜してもよいのではないか。普通科については、一般入試において総合的に選抜するのであれば、推薦入試でなくとも調査書は十分に活用されるのではないか。また、推薦入試は、合格後の学習意欲の面等、デメリットが大きいという意見も多い。普通科の推薦入試については、廃止も含めて、再考が必要だと思う。
- (委員) 現在の制度の善し悪しだけでなく、推薦入試をなぜ導入したのか等、本来の推薦入試の意義、推薦入試の位置づけを考えたい。学力点だけで生徒をはかれない場合、推薦入試という制度も必要になるのではないか。
- (座長) これまでも多少議論してはきたが、廃止の方向で入選審に報告するのであれば、推薦入試のもつ本来の位置づけについての検討は必要だ。

- (委員) 多様な子どもたちに対応するために、複線化という入試改善が図られてきたのだと思う。現在、少子化が進み、入試倍率が低い状況で、複線化の役割が果たせない現状があり、推薦入試はあってもなくともよいのではないかという意見もある。しかし、これまでの入試改善の歴史があり、なくすことはできない。なくすことは後退である。複線化を前提に更に発展させる方向で考えたい。
- (座長) 推薦入試は、農業、水産業の後継者の養成という観点から導入された。推薦入試については、割合の問題と、普通科と専門学科を分けて検討する必要があるのではないか。
- (委員) 推薦入試の廃止という意見は、子どもの受検機会の公平さ、中学校での選抜が必要になるというのが背景にあると思う。ここをスッキリさせること、また、推薦基準の明確さが必要である。
- (委員) 受検機会の複線化と入試制度とは分けて考える必要があるのではないか。専門学科と普通科とでは選抜の観点が違う。普通科の場合は、複数の受検機会を確保するのであれば、推薦入試ではなく、例えば、大学入試のやり方、つまり、一般入試を2回実施するということも考えられるのではないか。
- (座長) 今日、ハッキリと決めることは必要としない。現在の推薦入試を見直す方向でよいのではないか。その場合、普通科については、割合を減らす方向で、0もあり得るということも視野に。一方、専門学科は現状でよいか。ただし、報告の中では、普通科の推薦入試について廃止の意見が委員から出ていることも付け加えたい。
- (委員) 中学校では、推薦入試での受検を希望している生徒について、校長推薦を受けられなくても、また、不合格だった場合も、すぐに切り替えて一般入試の受験勉強に取り組むように、また、その学校を一般入試で受検するように指導している。不合格だった場合のショックの受け方については実際になってみないとわからない。
- (座長) 校長推薦の校内選考の在り方も、問題点の一つととらえたい。次に一般入試、調査書の活用、合わせて受検機会を含めて、総合的に御意見を。
- (委員) Q10に関して、高校側では「改善すべき」が多いが、高校側からみる推薦入試のメリットは。
- (委員) 高校入学後の学習・生活状況、進路状況からみて、推薦入試は一定の機能を維持しているという、前回の議論でもあった部分がメリットである。
- (委員) 単に推薦されたというプライドだけでなく、中学校側の特別な指導がその点に繋がっているのではないか。高校側に中退や進路変更の問題があるが、推薦

合格者については少ないという状況がみられ、推薦入試の大きな成果でないか。

(座長) 専門学科を含めたQ10の数字である。調査結果をどうみるか、見方によって変わる。推薦入試についてはさらに検討していきたい。調査書の活用についての御意見を。

(高校教育課長) 入試制度の改善のスケジュールとは別に、調査書の改善について、前倒しは可能か。小委員会からの報告という形でまとめられるか。

(座長) 具体的な改善の原案はあるのか。

(高校教育課長) 改善の原案については今後の検討となるが、調査書についてはできるだけ早い時期に改善すべきという方向で議論をまとめることは可能か。

(座長) いかがか。  
(賛成の声あり)

(委員) 調査書の様式の見直しの時期の予定は。生徒指導要録、調査書を必ず見直す必要が生まれる学習指導要領の改訂の時期と重なっているが。

(高校教育課長) 現在は、具体的なスケジュールをもっているわけではない。

(座長) 一般入試の学力検査問題を大幅に変えるという意見はない。  
一般入試の選抜方法において調査書点と学力点を総合的にみるということはいいが、その比重のおき方、学校裁量幅については今後検討していく。  
調査書についての改善は必要。多面的にみるという重要な役割もあり、公平性、透明性を保持する必要がある。できれば簡素化することも含め検討したい。

3回の受検機会を大枠として保持する方向でいきたい。

ここまでの議論を踏まえて、「中間まとめ」の柱立てを示しながら、11月20日の審議会に私の方から報告したいと思う。今後の改善に向けた基本的な考え方について改めて3点確認したい。

受検する立場の中学生にとって公平であること。

中学校と高校の教育内容、学校生活を繋ぐ役割を果たせるようなものであること。キャリア教育の視点からも、入試を子どもたちが大人になる一つのきっかけにしたいということ。

学力向上に繋がるもの。入試は勉強する大切な機会である。入試において、5教科を核にしつつも、広い意味での学力、生活力をみていきたい。入試のもつ社会的役割を果たしたい。

大筋については御了解いただいたということで、この後は私と事務局で細部をつめて文書にし、皆さんにもメール等で事前にお知らせしたいと思う。

(一同了解)



(座長)

次回については事務局からあったとおり。本日の私の議長としての役目はここまでとする。

( 高校教育課長あいさつ )

( 閉会 )

非公開情報を除き記録概要としてまとめたものである。